

べきであると思う人は、所属では大学、分野では光・赤外、電波、理論に多いが、一方、緯度観測所、地球回転などでは系の自主性を尊重するという声が強くなっている。こうした回答結果をみると、共同利用ないし国立大学共同利用機関としての新研究所に対する共通の理解はまだ十分に深まっていないと思われる。改組を突りあるものにし、円滑に進めるためには、こうした基本的な問題について、特に分野間の相互理解を深めるための努力が必要であろう。

第2は人材をいかに確保するかという問題である。例えば改革が進んで系や部門の配置が一新したとしても、研究を推進する人材を継続的に確保する方策がなければ改革は一時的なものになってしまうのは明らかである。研究所の寿命が10年であるとか、一世代に限られるとかいわれているのも人材を得ることの難しさを示唆したものであろう。アンケートの回答にもそれが反映している。人材を得るには人事が研究所内に閉じないということが基本であり、具体的には人事交流をいかに促進するかという問題に絞られる。これについては回答者の関心も高く、アンケートでは実に160名の方が人事交流について何らかのコメントを寄せている。主な意見を拾うと

任期制（特に助手）、昇任制限を望む。

教官の停年を引下げる。

人事委員会に所外の声を反映させる。

評価制度を整備する。

外国人研究者の任用をはかる。

併任制、客員部門を活用する。

各大学の研究教育条件を整備する。

大学間の格差をなくす。

などが気をついたところである。人事交流の促進は研究所内の規制や努力だけでは不可能で、全国の大学、研究所をふくめた天文全体としての取組みが必要である。しかし、そのためにも、新研究所が人事に対し十分にオープンになるよう私としても希望したい。

第3は新研究所と大学との関係である。新研究所に対する不安（不信）で最も多かったのは物と人が集中し、地方（大学）との格差がすすむ（いわゆるモノポリーの弊害）である。全体でも69%の人が何らかの不安を持っているが、大学所属者では84%に達し、非常に不安に思うという人が44%もいるのである。それではモノポリーの弊害を防ぐにはどうしたら良いか。アンケートにはこれについての設問もなく、冒頭の自由記述で直接触れた人も少なかったが、人事交流の欄などに表われたコメントなどからある程度は推定することが出来る。

理念的に言えば、その方向とは大学における研究教育の活性化と、それに伴う人事交流の促進ということであろう。現実的にはどちらにも多くの困難があり、将来に

おける最大の努力目標になるであろうが、少なくとも新しい研究所の発足と平行してこれらの問題に取り組むよう、各大学や大学所属研究者に努力を求めたい。それと同時に、新研究所に対しても十分な支援体制をとられるよう強く希望したのである。

その他のいろいろな問題については紙数の関係で省略する。

「天文学の国立研究所」についての アンケート結果にたいする感想

田中寅夫（京都大学防災研究所）

測地学、その中でも特に地殻変動などによる地震予知及び地球潮汐の研究に携わってきた関係上、私にも緯度観測所および東京天文台の一部の分野の方々とは、研究上大きなつながりが以前からありました。したがって、昭和60年に出された測地審議会の緯度観測所のあり方についての答申と、それに基づいて行われるであろう同所の改組と将来にも深い関心を抱いてきました。アンケートに対する回答に、ある固体地球物理関連の方が、「測地学の国際観測所として出発し、重きをなしてきた緯度観測所が今、何故独立した機関としての存在を止めたのか」と書いておられますが、私もやはりいまだ同じ思いにとらわれているのは事実であります。それはともかくとして、「測地学」固有の研究所がない現在のわが国において、こんご VLBI とか GPS 等といった宇宙技術を利用して、地球の形から地球ダイナミックスの研究にまでつながって行くであろう将来の測地学研究の中心機関として、新研究所がその役割をしっかりと担って行ってほしいという意見は固体地球研究分野の方から述べられていますし、私も強く希望するところがあります。

ところで、このアンケートに私自身が回答したときのことを思い出しますと、主旨が十分に理解できない設問もあったのですが、なかなか簡単には回答が記入できませんでした。いまその結果を見せてもらいますと、設問もそれに対する回答者のご意見もすんなりとよく理解できます。光学赤外線天文学、理論天文学あるいは電波天文学などといった、いわば新研究所の主要分野に属する方達の回答を見ても、「全体としての方針としては支持するが開かれた研究所であって欲しい、人事交流が重要である、モノポリーへの心配がある、……」など、私と同じような回答が大勢を占めており、特に不思議に思ったり、私としては賛成できないといった事柄は全般的に言っておりません。ただ、ちょっと面白いと思ったのは、国内客員部門に関する設問に対し、「応募したいが（仮に半年以下としても）困難」とされた方が89名あり、応募したいと答えた人（68）を大きく上回っている

ことです。他方、共同研究に関しては、「アトム・モンキョラー型等の共同研究形態を積極的に利用する」とされている方が 172 名と多数あります。このことから、「客員として新研究所に参加して共同研究に取り組みたいが、諸般の事情でおそらく不可能であろうから、後者の共同研究形態を利用したい」と皆さんは考えておられるのではないかと、私には思われます。それぞれの機関にはそれぞれの事情がありますし、必ずしも新研究所だけの問題ではありませんが、やはり、このような「客員として研究に参加したい」ひとが実際に参加できるようなありかたを考える必要があると思います。

以上、アンケート結果の客観的な報告と分析は別に改

組準備調査室からなされていますから、ここでは、固体地球物理、それも測地学の関連の分野に所属している、新研究所の中でもいわば境界領域に近いものの立場から、アンケートの結果に対する私の感想とそれについて考えたことを述べました。いずれにしても、主流はもとより境界領域迄を含めた、広範な学問の推進こそが大切なことであることはいうまでもないことですから、そのことを最も重視して（残念ながら現実にはそうでないかと判断せざるを得ない事例もしばしば見かけますので）、新研究所の在り方、今後の運営方針などを考えていって欲しいと思います。

雑 報

こぎつね座 1987 年新星

茨城県水戸市の桜井幸夫氏は、1987 年 11 月 16 日の夕方に撮影した 2 枚の写真フィルム（フジカラー HR1600）上に新星状の像を発見して、東京天文台へ連絡して来られた。この新星はベックマンとコリンズにより 11 月 15 日にそれぞれ独立で発見された新星と同じ星であり、桜井氏も独立発見者の一人となった。なお、この新星の位置は、スミソニアン天体物理天文台のホリン達による望遠鏡の目盛による測定では、

$$\alpha = 19^{\text{h}}04^{\text{m}}09^{\text{s}}, \quad \delta = +21^{\circ}44'24'' \quad (1987.8)$$

であり、スペクトルには K1 の吸収線と H α の強い輝線が見える、という (IAUC 4489, 4492 等)。

市村彗星 1987d1 の発見

埼玉県比企郡吉見町の市村義美氏は、同氏たちのグループで運営する“いわき天体観測所”（福島県いわき市）で、1987 年 11 月 22 日 21 時 30 分 (J.S.T.) にエリダヌス座の $\alpha = 3^{\text{h}}57^{\text{m}}7^{\text{s}}$, $\delta = -19^{\circ}12'$ の位置に 9 等級の彗星像を口径 12 cm, 20 倍の双眼鏡で発見し、22 時 40 分には南へ約 9 分角移動しているのを確認して直ちに東京天文台へ連絡して来られた。同観測所には他に数名の同じグループの人達がいる、その人達によっても確認されていた。特に、田中政明、斉藤勉の両氏は直ちに写真撮影を行ない、その原板を東京天文台へ持参された。東京天文台では直ちに IAU 天文電報中央局へこの事実を通報したところ、アメリカでも M. ルデソコが確認し 1987d1 = Ichimura Comet と名付けられた。尚、田中政明氏の 16 cm F2.5 シュミットの原板を筆者が測定し、次の結果を得た。

$$1987 \text{ Nov. } 22.58397 \quad \alpha = 3^{\text{h}}57^{\text{m}}32^{\text{s}}20 \quad (1950.0) \\ \delta = -19^{\circ}14'41''.2$$

IAU の取り決めで年内の発見数が 26 個を越え、英語の a~z が埋まった時は、a1, b1, …… とすることになっている。今回の市村彗星は 1987d1 であり、これは 1987 年中の 30 個目に相当する。過去の最多記録は 1983 年の 22 個であり、今年はその記録を更新している。

新彗星 Furuyama (1987f1) の発見

茨城県利根町の古山茂氏は、1987 年 11 月 23 日 16 時 10 分に撮影したオリオン座北西部の写真フィルム上に、光度 12 等級の彗星像を発見した。翌 11 月 24 日に再び同星野を撮影し、更に友人の協力を得て肉眼観測を行ない、その天体の移動を確認して東京天文台へ通報して来られた。

東京天文台では古山氏が過去にも 1975X=Suzuki-Saigusa-Mori 彗星の第 5 番目（同じ発見日）の発見者であり、またベテランの彗星観測者であることから、直ちに国際天文学連合天文電報中央局へ通報した。その結果、パロマー天文台でシューメイカ夫妻の撮影していたフィルム上でも検出されて新彗星が誕生した。この古山彗星の発見で 1987 年に発見・検出された彗星は 32 個となり、また日本人の発見は 4 個である。尚、日本人の発見した彗星の総数は 50 個となった。

(以上 香西洋樹)

☆ ☆ ☆